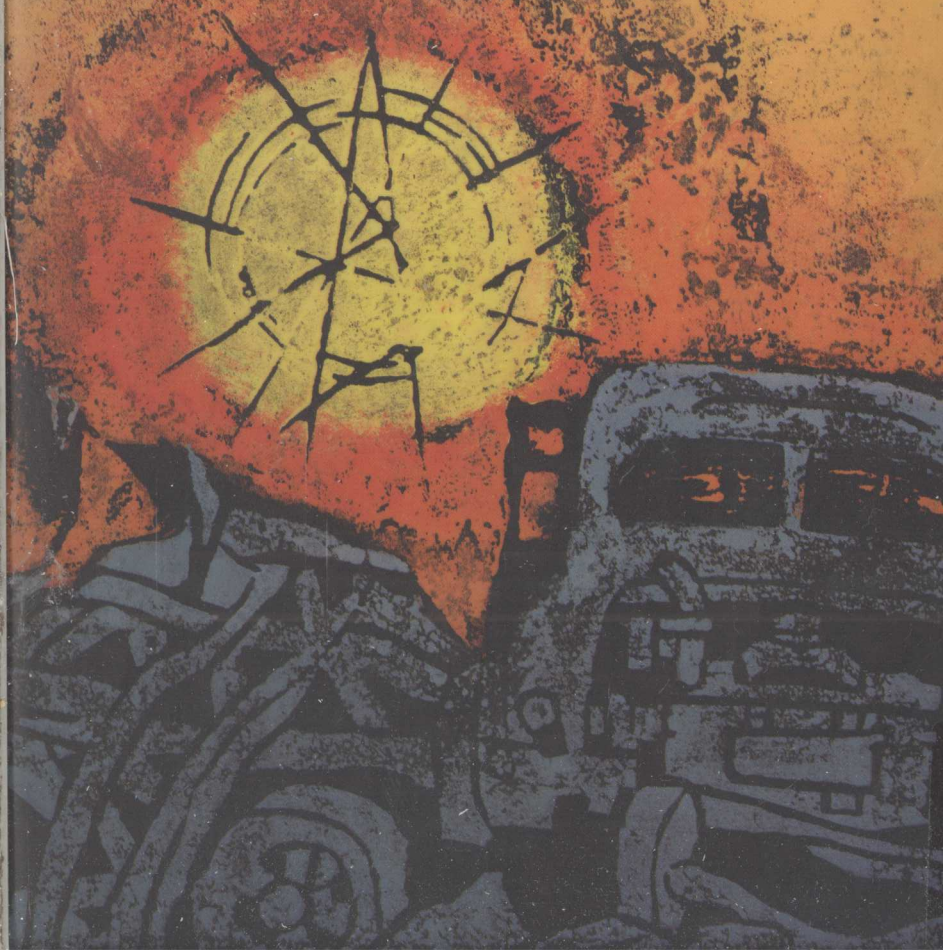


わが街角 (五)

街角にひとり

早乙女勝元



わが街角 (五) 街角にひとり

早乙女勝元



わが街角 (五) 街角にひとり

昭和五十一年十一月二十日 印刷
昭和五十一年十一月二十五日 発行

定価八〇〇円

著者 早乙女勝元

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一
郵便番号 一六二
電話 東京三六五二(業務)
東京三六〇五(編集)
振替 東京四一八〇八

乱丁・落丁本は、御面倒ですが、小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社金羊社 製本・新宿加藤製本株式会社

© Katsumoto Saotome, Printed in Japan, 1976.

わが街角

(五)

街角にひとり

第十七章



静かだ。とても静かだ。こんな静かなことはない。まるで死んでいるみたいだ。……

早瀬勝平は今、おそろしいような静寂の中にいる。歩いて行く。ただ歩くことだけが唯一の目的でもあるかのように、駿之助の背にしたがって行く。もしかすると、ほんとうに死んでいるのではないかと思つたが、生きていることの粉れもない証拠に、胸の内から突きあげてくるものがある。吸いこんだ焦煙がぐぐつといがらっぽく喉にくる。火の粉にやられた目は、チカチカとして、ガラスの破片でも無数にささりこんだようでもある。そして、この異臭。いや、それよりもなによりも生きて歩いていることを確認させるのは、一歩ずつ踏みしめていく大地の奇妙な感触であった。

アスファルトの路面は、ぐにやぐにやに溶けてあばた状になり、まだ余熱を残している。

とうてい一カ所に足を止めてはいられない。運動靴のゴム底がやられてしまう。想像を絶するばかりの地熱だった。おそらく地上はすべて白熱状態になったのである。火は燃え移るといふのではなくて、やみくもに走って、地上の物体を爆発的に炎に変えた。路上を埋めつくしているおびたしい物量の瓦礫は、指先で触ればまだジリッときそうなるほてりがある。

どこをどう歩いているのかもわからない。見渡すかぎりの焦土だ。寂漠とした廢墟、瓦礫の海だ。町は、建造物や電柱や橋などの特徴を失うと、町でなくなる。のっぺらぼう。目鼻立ちを取りはずした顔と同じだ。もしかして、この瓦礫の海は地平線を越えて、地球の裏面までも続いているのではないのか。

つい数時間前まで吹き荒れていた烈風は止んだが、焼け焦げだらけの衣服の裂け目からしのん

でくる風は、刺すように鋭かった。その北風に押されて、余燼の上にひくくたなびいていた薄墨色の、煙とも雲ともつかぬ厚い層が静かに動いてゆく。まだあちこちで火は燃えていた。地上からぐいと鎌首を持ちあげたガス管からは青白い火花が散り、水道管の水が吹き出している。不思議なことに、その音はきこえない。だから、この世の現実とは思えないのだ。ひよっとして悪い夢でも見ているのではないかという思いが、またあらためて脳裏をかすめる。夢なら一刻も早くさめてほしい夢である。いつまでも見ていたら、あまりの息苦しさに胸が押しつぶされてしまう。勝平は、無意識のうちにまばたきした。瞼の奥に、なにかジャリッとするような異物感があった。それが痛覚につながる。とたん右足にからみつくものがあった。危うく転倒するところだった。うまく避けられたのは、普通の歩きかたをしてないせいである。焼け残りの電線だった。黒焦げの電柱の一部分が電線にからまって行手をふさぎ、かすかに白煙を吹きあげている。焼けトタンが幾重にも散乱する中に、電線がジグザグに巻き上っている。

かがみこんで、足首にしがみついたのをはずした。すぐ横に妙に白っぽく光るものがあった。便器である。窓枠に鉄窓のついた家だったらしく、赤茶けた鉄棒から、ガラスの溶けたのが、氷柱のように垂れている。すると、その氷柱の下の路面に、六角形の模様が目についた。気がつく、足元のあちらこちらにある。なんだろう。

「ずいぶん落ちたんだな。このあたりは」

駿之助が、鉄カブトの下から、はじめて重苦しい声を吐き出した。

勝平は、黙ってうなずいた。

そうか。これがB29の焼夷弾のあとか……と思う。これが雨アラレと落ちてきたところから、不思議な夢が続いているんだ。夢だかうつつだかわからないような、そんな妙なたよりない感覚が煙みだりに流れてきて、ふうつと意識が遠のき薄らいでゆくような気がする。そういえば、目につくものなものなにもかもが、朦朧として暗い。電線と焼けトタンの波をかきわけるようにして

歩いてゆく道の先に、一本の丸太が燃えている。こんなに燃えつくしても、まだ燃えるものが残っていたらしい。

駿之助の背について、勝平は歩いた。すると、駿之助の足がとまった。その足元に目を落したとき、思わずはっと息を引いた。

丸太だと見えたのは、実は親子抱きあって黒焦げとなった死体なのだった。大人の頭部と小さな幼児は、完全に燃えつくして炭化していたが、まだジブジブとくすぶっているのは、その丸太のような胴体の中心部であった。子どもを右手に抱きしめて、仰向けに横たわっている人は、男か女か、髪の毛のない頭をそり気味に地面から浮かせ、ぎらぎらと脂肪で黒光りした腹部からは、渦巻型の腸が露出している。内臓の脂が燃えているのだ。

「ああ……」

強烈な臭気に、勝平は口をひらき、声にならない声を洩らした。

ふいに思い出した。そうだ、お玉おばさんはどうしたろう……お玉おばさんは？　もうこれが最後かというおそろしい瞬間に、一握りのほうれん草を口の中に押しこんでくれたおばさんは、たしか背に小さな平タンをしょっていた。平タンは、歩きはじめてちよっとの二歳。とすると、もしかして、その平タンではないのか、この子は？

勝平は、もう一度ふりかえって路上の焼死体に目をやった。だが、男か女かさえもわからぬ死体に、とうていお玉おばさんかどうかの判別はつきかねた。

すでに一片の炭となったわが子を抱きしめた大人は、たぶん若い母親であろう。丸い頭部の前面には、二つの目と口だけがぼっかりと開いて、耳もなかった。耳の位置には、小さな穴があるのに過ぎない。まるでタドンだ。タドンと同じだ。タドンは燃えずに、腹部だけがジブジブとくすぶって、紫煙を宙に引いている。勝平は目を閉じた。ふたたび頭の中がぼろとくすんでいく。つぎに目を開くと、またもや焼死体にぶつかった。今度の死体も、男か女かわからない。防火

貯水槽の中に、すっぽりと入ってうずくまっている。上体は黒焦げで、またまたタドンの頭なのだが下半身は焼けていない。地下足袋をはいて膝を折ってうずくまっている。おそらく水は灼熱の温度で蒸発してしまったのであろう。だから水のあった部分だけは焼けずに残ったのにちがいない。コンクリートの貯水槽に片手だけ出してすがっていたが、その五指はもはや骨だけになっていた。そして、そこから先は、もう個々の焼死体に驚いてなぞいられなかった。驚くにしては、あまりにも異様な死体が多すぎた。それにいちいち驚いていたら、歩いていくことはできはしない。焼かれて死んだ人間は、すでに人間ではなかった。一片の炭であり、物体なのであった。

恐怖はない。恐怖などという人間的感觉は、とっくの昔にどこかに消えてしまっている。

しかし、一片の炭か物体でしかないはずの死者の中には、すでに失われたはずの恐怖をよみがえらせるに足る衝撃的なそれもあった。たぶん町の銭湯なのであろう。タイル張りの仕切りの両側にかなりの大きさの四角い浴槽があって、そこに大勢の男女がそれぞれの姿態でうずくまっている。みな全裸であった。こちらは不思議なことには黒焦げのは一体もない。男も女も、子どももみなつややかな肌を惜しげもなく寒風にさらしている。浴槽のふちから顔だけ出した男は、鉄カブトの下にかつと両目を見開き、その鼻孔からびっくりするほど赤い鮮血が流れていた。

勝平は、駿之助の背に吸いつくようにして立ちながら、顔だけよじって目をいっばいに押しひろげた。

死んでいる……。

思わず、ほうっと吐息を洩らした。

「うむ」

勝平の声がとどいたのかどうか、駿之助がひくくうめいた。

「行くぞ」

と、いった。

勝平は、駿之助に続いて歩き出した。その焼け焦げだらけの背に視点をすえながら、もう二度とふりかえることはしなかった。ふりかえってもしかたがない。その気力もない。しかし、あの人たちは入浴中に焼かれて死んだのだろうか。まさかと思う。周囲がすべて火に閉ざされているときに、のんびりと裸で湯につかる馬鹿はいない。人びとは、火を逃れてわれ先にと浴槽の中に入り、酸素を奪われて窒息死したのだ。衣類はみな炎になって消えたのである。全裸に皮靴だけをはいた死者がいたことで、それとわかる。銭湯について呼吸がつかえたのは、四辻の角の小さな交番の中に、ぎっしりと詰った焼死体だった。まるで新品のマツチ箱のように詰っている。胴体も手足も完全に焼けて溶けて、ひっそりとタドンの頭部だけをならべている。黒焦げの死体の足から、ゲートルの灰がばらばらと風に散って舞い上り、ほおのあたりをかすめていった。

勝平は、ぶるっと身ぶるいした。

自分の頭部も、まっくらなタドンになっているかのような戦慄がある。

あわてて駿之助の背を凝視した。鉄カブトの両がわに、二つの耳がいやに大きく出ばって見える。タドンではない。ああ、よかったと思う。やはり生きているのだ、と思う。

その頃になって勝平は、北風のひゅうといううなりの中に、かすかに地鳴りのように大地を這って響いてくるものを、耳にとらえた。死体ばかりと思ったが、生きているのは自分たちだけじゃなかった。まだ生命ある人が死者の中にまぎれていたのだ。あちこちから、呪わしげなうめき声が高くひくく重なりあつてきこえてくる。真っ黒な顔に赤むくれの目をぎよろつかせた男が、焼死体の列から上体をかすかに浮かせて「おねがいだ。殺して、殺してくれ！」とさげんだ。そうかと思うと、大型の皮財布をつきつけて、皺深い唇でなにか必死に訴える老婆もいた。意味はよくききとれなかったが、どこそこの町までつれていってくれというこらししい。そういわれてみても、しかしどうしようもないのだった。

突然、泥まみれの髪の毛をふり乱した半狂乱の女が、三、四歳の幼児を横抱きにひっかかえ、目を吊り上げて走ってきた。女はまだ燃えカスをとどめて炎にとりつかれている鉄骨の梁の下から、何かをさげびながら現われ、駿之助と勝平の姿を目にとめると、真一文字に突進してきた。「この子を、この子を……、た、助けておくれ。も、死にそうなんだよ。ほら、ほら、ほら！」と、息もたえだえに胸にかかえた子どもを揺すり上げて、鼻先に突きつける。煤だらけの顔に、二つの目ばかりが充血している。

「た、助けておくれってば。も、も、死にそうに……この子は！」

赤いメリンスの防空頭巾をかぶった女の子は、異様に白い顔をさらして口をかすかに開き、仰向けにのけぞっていた。駿之助は、絶望的に首をふった。

女の口から、ああ……という声が、棒状の息になって飛び出した。

「あんた、医者じゃなかったのかえ」

「医者ではない」

「そんじゃ、その医者は、どこに？ え、どこにいるんだい、どこに？」
と、たたみこんで迫る。

「さあ。それは知らん。焼け残りの町まで行かんことにはな」

「その焼け残りの町は、どこ？」

駿之助はまた首をふって、

「わしらも、その町を目指している。お気の毒だが……」

まにあわん、と女は下唇をふるわせ、ひいーっと息を吞んで歯ぎしりした。勝平はその前歯の激しくかみあう音をきいた。

「これだけの大被害ならば、どこかに救護隊がいるはずだ。医者も看護婦もないはずはなからう。うむ、どこかにな」

駿之助はいったが、その声か耳にとどいたのかどうか、女はふたたび、瓦礫の中をさまよっている別な人影を求めて走った。勝平は、ぼんやりとした目でその後姿を見送った。あの人影が医者ならばよいのだけど、と思う。医者であってほしい。でない、小さな女の子は死んでしまう。タドンの頭と同じになってしまう。でも、たとえ医者だったにしても、昨夜の火焰地獄から這い出してきた人じゃだめなんだ。必要な医療品も持ってはいないだろうし、それだけの体力も残されてはいないだろう。

寒気が、ぞくっと足元から襲ってきた。骨まで凍るような鋭い冷気だった。焦土を渡ってきた北風が運んでくるのであろう。一枚の焼けトタンが乾いた音を立ててめくれあがり、そのトタンの下にうずくまった死者の黒焦げの片手を露出させた。虚空をつかんでいた手首が、焼けトタンの端にふれて、ぼろっとはがれて落ちた。どこもかしこも、焼けただれた大地は赤茶けたトタン板の波と、死体だらけだ。なんともいいようのない鬼気が、あたりにただよう。それが、なおさらのこと寒気をさそう。さっきの女と同じに、前歯がカチカチと音を立てて鳴り出した。一度鳴り出したら、どうやってみても押えがきかない。身体中の骨という骨が、関節の部分でみな互いに触れあって鳴り出したようでもある。

二人は黙々と歩いて、いつのまにか、運河沿いの道にまできていた。橋はない。ほとんどみな焼け落ちていて、木製でなくてかろうじて焼失をまぬがれた橋には、足の踏み場所もないほど累と死体が山積しているのが見える。空中から垂れた架線に、片手をかけて宙吊りになった死体もある。大人にしては小さかった。すると子どもか。小さな幼児だったら、あのものすごい火事嵐のような乱気流の中で、親の手から離れたら最後、空中にまで吹き飛ばされたかもしれない。それでも人の通過できるぐらいのゆとりはあるのか、だれか防空頭巾の男が、自転車を肩にかついでとほとほと橋を渡ってゆく。死体の上をころがしていくわけにはいかなないのであろう。水面は、あえて見る必要もなかった。ここには早くも死体処理にあたる男たちが出勤していて、おそ

ろしく緩慢な動きで作業を続けている。まるで影絵のようだ。黒いオーバアは警防団の隊員だったが、鉄カプトにカーキ色の服は、軍隊か。焦土の死体処理は、まずいくつもの運河を中心にして開始されたようである。最後の活路を、水に求めた人びとがそれだけ多かったのであろう。火に水は強いはずだったが、その水もまた水の役割を果すことなく火焰に吞まれたことを、勝平は知っている。

「そういえば、登美はどうしただろう。トミイは……」

生きているのか、死んでいるのか。今は、それをいってもはじまらなかった。第一、だれに問うて問いかけてよいものやら、相手はいない。相手は死者ばかりだ。焼け樫かしと化した死体は、つぎつぎと対岸に薪のように積み上げられていく。羽根をもぎとられた大きなバッタのようにも見える。タドンの頭の胴体だけが一カ所に集積されると、もぎれて落ちた手足も、また別な一カ所に山となってゆく。そうかと思うと、五体そろってどこも焼けていない蠟人形のような死体もある。今、戸板に乘せられて運ばれていった若い女は、長い黒髪から水滴を垂らして、のけぞった姿勢のまま、おいでおいでもするように片手を上げていた。順番を待って、燃えくずれた橋桁のそばの水中から首だけ出した男もいる、ぎょろりと開いた両眼で、無心にこちらを見ている。堤防の上から、声をかぎりとだれかの名前を連呼している女がいたが、水面の男の瞳孔は微動だにしないかった。

「ああ……」

勝平は、カチカチと奥歯のかみあって鳴る音をきいた。

見ないほうがよい。目を閉じているのに限るのだが、ついそっちに目が移り、臉を動かすたびに、あの異物感があるのがたまらない。

「寒いか」

歩きながら、駿之助が鉄カプトのひさしをまわした。

「寒い」

と答えると、

「どこかで、火を見つけよう。少しあたらんといかんぞ」

「火は、ゆうべあたったよ」

「そうだ、少々余分にあたりすぎたのだ」

駿之助は、声を立てずに、喉の奥でむせるように笑った。

「とうちゃん、どこまで歩く？」

「どこまでって、勝平、決ってるじゃないか、家へかえるのだ」

「その家、あるの？」

「さあて」

駿之助は、煤だらけの重苦しい表情に変えて、後はつぶやくようにいう。

「あるかないか、とにかく一度はかえらんとな。われわれもそうだが、生きている者はみな、古巣へ戻ってくるはずだ」

一度はかえるというものの、そのかえるべき家が瓦礫の海の中に、ぼつんと立ってはいようなどとは思えなかった。方向感覚がなくなつて、どこをどう歩いているのかもわからないが、しかし、鈴もカヨ子も、その「古巣」を目指して、この無限大の焦土を黙々と歩いているのだろうか。甚一郎じいさまも、おたね婆さんも、トミイも千造も、お玉おぼさんも、みな同じ方向に顔を向けて一歩ずつ足を運んでいるものとする信じたいが、はたしてどうか。こうして歩いていると、ものいわぬ死者ばかり。だから、生きて歩いている人に出くわすと、もうそれだけで、無性に胸が熱くなつてくるのを押えようがない。

川岸の鉄工場の焼跡に、何人かの人びとが寄りかたまっていた。近づいてみると、倉庫のコークスが赤々と燃えていて、ズブぬれの人びとがみな両手をかざして取り巻いている。火は火でも、

こちらの火はあたたかそうでなつかしい。人垣の隙間に、駿之助と勝平は立った。たまらなく人恋しいような切実な感情があふれてきて、勝平は、周囲の人びとに目をやった。男も女もいたが、六、七人の人たちはみな兎のような目をして、その目がなぜか奇妙に空虚であった。言葉をかわす者もない。みな黙念と立ったり坐ったりしている。火の一点を見つめている。ビシ^ニぬれの衣類から湯気が煙となって視力がかすむと、ふいに、瓦礫の端に腰かけていた男が、がくっと前のめりになった。

「眠ったらいけない。眠ったら、死ぬぞ」

はっと気づいたように、男の一人が大声でわめき散らした。

「ほら、見る！」

倒れた男の肩をグイグイと二、三度強く揺すった。すでに返事はなかった。男は白い湯気の塊となつて、されるがままになっている。

勝平は、ひどく薄気味悪くなった。指先が固くこわばり、肩の骨がきくと音を立てた。コークスの火はありがたいが、ここも長居をする場所ではなさそうである。やつとの思いで生きのびた者も、あっけなく死の淵に引きこまれてゆく。死とは、こんなにもかんたんなものなのか。思わず駿之助の顔を見た。重く垂れた瞼の下に駿之助の目が勝平をとらえ、黙ってあごをしゃくつた。

またもや焦土の中へと足を踏み入れた。行けども行けども、赤茶けた荒野は変わらない。視界をさえぎるものは何もなく、黒と茶と灰白色の世界が一望の下に開けている。ところどころ焼けたビルや学校が、空洞の窓をひろげ、煙突がマッチ棒のように屹立して、土蔵と金庫ばかりが、ぼつんぼつんと点在している光景も、すでに不思議でなくなった。なれたのだ。しかし、あたりは次第に明るみを取り戻していた。焦煙のひくくただよう地平線から昇ってきたばかりの太陽は、まるで空中から吊りあげたもののように不安定に揺れて、しかもおどろくほど馬鹿でかい。その